

長屋王家の消費と流通経済

労働力編成と貨幣・物価を中心に

榎木謙周

The Consumption of Prince Nagaya's Household and the Distribution Economy in Ancient Japan: Money, Prices and the Organization of Labour Power

はじめに

① 物品・労働力の入手形態

② 貨幣と物価

むすびにかえて

【論文要旨】

本稿では、まず長屋王家木簡を素材にして、長屋王家で消費された物資や労働力の入手形態について分析した。直轄地の経営、邸内での生産、運輸活動などのそれぞれについて検討した結果、これらすべての局面を通じてみられる特徴として、交換経済に依存する部面が意外に大きかったことが明らかになった。巨大な家産経済の消費を支える上で、自給自足的な物資の生産が行われていたことは事実であるが、その活動に必要な労働力は、長屋王家直属の諸階層の労働力のみでなく、広く外部の雇傭労働力に依存していた。このことは、労働の場として邸内・邸外いずれにも指摘できる重要な特色である。そのための財源も、米あるいは銭や布などの「貨幣」が広く用いられていた。また、手工業製品を中心に、邸内での生産品とは別に購入によって入手した物品も若干みられる一方、「店」などを通して酒食の販売が行われていたことも推測されており、交易活動が家産経済に組み込まれていたことが知られる。

次いで、米や布を取り上げ、それらの「商品」「貨幣」としての流通の様相を分析した。長屋王家木簡の時期だけでなく、その後の展開も視野に入れて検討した結果、それらが商品または貨幣として都市を中心に流通する上で、労働のために給付する財源としてあったことが決定的に重要であることが知られた。また、雇傭労働の功直の期的変化を取り上げ、それと米価との相関関係を調べた結果、当時の都市社会において、両者に一種の市場的交換関係が作用していたことを推測した。そして、このような関係が存在したことが、都市民を対象とした米価政策が現れてくる背景として考えられることを述べた。